

氏名(本籍) 樋口 由美(京都府)

学位の種類 修士(看護学)

学位記番号 修士第56号

学位授与年月日 平成17年3月25日

学位論文題目 ホームヘルパーの介護労働における身体的負担の評価と介入効果

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	57	(ふりがな) 氏 名	樋口 由美
修士論文題目	ホームヘルパーの介護労働における身体的負担の評価と介入効果		
<p>【研究の目的】 ホームヘルパーの作業関連性筋骨格系障害は 1990 年代以降に浮上した、欧米、本邦に共通の問題である。訪問介護現場における作業負担軽減を目的とした介入研究は、2000 年以降に欧米において報告されるようになったものの、本邦においては報告されていない。そこで本研究は、訪問介護現場においてホームヘルパーの身体的負担の評価および介入を行い、負担軽減効果を検証することを目的とした。</p> <p>【方法】 本研究の説明を受け参加に同意した、女性ホームヘルパーと身体介護を含む訪問介護サービス利用者 10 事例を対象とした。英国労働安全行政部が提案したものを基盤に作成した介入事前評価チェックリストを使用して、ホームヘルパーの作業場면을観察し、筋骨格系障害のリスク要因となる問題点を抽出した。現場において改善策の立案、検討を行い、ホームヘルパーと利用者（家人含む）との協議後に決定した介入方法を実施した。介入前後の評価指標として、1) Borg scale による自覚的作業負担度（以下、主観尺度）、2) 聞き取り、3) 僧帽筋、Th12-L1 と L3-L4 の脊柱起立筋群各部位の筋電図（実効筋電位 95 パーセントイル値から算出した EMG 改善率）、4) 一連続作業の所要時間変化を用いた。</p> <p>【結果と考察】 対象事例のうち 3 事例は利用者の入院、死亡等の理由により介入中止となり、7 事例が介入後評価まで至った。ホームヘルパーの年齢は 32～63 歳（平均 47.1 歳）、利用者は 56～92 歳であった。実施した介入方法は以下の 3 つに類別された；福祉用具の導入（3 事例）、家具・器機配置の変更（2 事例）、介助技術への助言（2 事例）。</p> <p>結果①主観尺度は介入により有意に低下し、最も低減した事例では 7（とても苦しい）から 2（軽い）へ変化した。結果②主観尺度と各部位の EMG 改善率との関連を検討した結果、以下が明らかとなった。1) 主観尺度非改善・EMG 非改善のものはない、2) 主観尺度改善・EMG 改善は、家具・器機配置の変更による介入のものが多い傾向を示した、3) 主観尺度非改善・EMG 改善は全て介助技術への助言による介入であった、4) 福祉用具の導入による介入は、全て主観尺度改善であったが EMG 改善率はばらつきを認めた。</p> <p>結果①、②-1) よりホームヘルパーの介護労働に対する介入の有用性が明らかにされた。結果②-3) は、介入は的確であったが「慣れた」介護方法を変更することへの抵抗感が示されたと推察され、筋骨格系障害の発生低下をめざすには継続的な研修活動の必要性が示唆された。結果②-4) は、用具導入により介護作業が前後で異なるものになることがあり、即時的評価では新しい作業に不慣れなこと等から EMG 改善率の評価がばらついたと推察した。</p> <p>【結論】 多様な作業環境である訪問介護において、適切にリスク評価に基づく介入はホームヘルパーの身体的負担軽減をもたらし、介入種別の違いが介入の即時的な効果に影響を与えることが示唆された。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。